

CARE World



ケア・インターナショナル ジャパンは、世界70カ国で貧困の根源の解決に取り組む国際協力NGO、CAREの日本事務局です。CAREの活動は、世界中の33万人のサポーターに支えられています。

Contents

page 1-2 ベトナム HIV/AIDS と人権プロジェクト

page 3-4 パキスタン緊急人道支援
パキスタンで大規模な国内避難民が発生、「緊急支援」における企業の戦略的フィランソピーの可能性

page 5 事務局からの報告
バナナを食べる社会貢献！「富楽宝(ブラボー)」ブランド祝1周年、「水」をキーワードに、新・企業連携スタート！/「日本モーツァルトコア」によるチャリティ演奏会 in Tokyo & Paris / レット支援のためのチャリティコンサートが開催されました/ケア・フランス長野発定

page 6-7 スーダン水と衛生改善事業
スーダン南部・水と衛生緊急支援事業、スーダン支援の現場から

page 8 CARE ストーリー
～グルジア紛争一あれから一年～、CARE Notice Board

Vol. **13** ケア・インターナショナル ジャパン
Newsletter
Oct 2009

「HIV/AIDS と人権プロジェクト」

ケア・インターナショナル ジャパンは、国際ボランティア貯金および民間企業（花王株式会社様およびキヤノン株式会社様）のご支援を受け、HIV陽性者の人権が尊重され、偏見や差別をなくすことを目指し、「HIV/AIDS と人権プロジェクト」を実施しました。2007年6月から2009年10月末まで、ベトナムのハノイ市、ホーチミン市、クワン・ニン県で実施された同事業の対象者はHIV陽性者、医療従事者、地方行政担当・政策策定者など約5,000名でした。

事業の背景

ベトナムはHIV感染者数の増加が著しい国の一つとされています。注射器の使い回しによる薬物使用者、性産業従事者、その顧客などの中での感染率が高い傾向があります。経済や観光開発が進むハノイ市、ホーチミン市、クワン・ニン省は、薬物の流通や性産業が多くあることに起因し、ベトナムの中でもHIV感染が特に深刻な地域となっています。

さらに、近年はHIV感染リスクの高いグループのみではなく、HIV陽性の夫から妻、そして母から子どもへというように、家族内のHIV感染の増加も確認されています。

また、ベトナムでは、HIV陽性者に対する偏見や差別が強く、そういった社会の否定的な態度により、HIV陽性者や家族が適切な医療や社会サービスを受けられないという状況もあります。例えば、HIV陽性者が病院で治療を希望しても受診を拒否される、他の患者とは異なる入院服を着用させられ、HIV陽性者であるということが一目で分かるようにさせられる、不当に高い治療費を請求される、など差別を受けます。教育現場では、HIV陽性の親をもつ子ども、HIV陽性の子どもの就学が拒否さ

れるという事例が多くあります。職場では、HIV陽性者という理由で解雇される人が多くいます。その他、地域社会での差別も深刻です。HIV陽性者がいる家族には挨拶をしない、近寄らない、隣に座らないということが頻繁に起きています。

事業の目的・内容

このような偏見や差別をなくし、HIV陽性者が良質の医療サービスを受け、仕事を継続し、HIV/エイズの影響を受けた児童・生徒が就学できることを目指し、「HIV/AIDS と人権プロジェクト」が開始されました。当事業では、第一に、HIV陽性者自助



中学校でのHIV予防啓発イベントで歌をうたう生徒たち
(後ろの横断幕には「ゆうちょのご支援をいただいています」と書かれています)

グループの能力向上研修を実施し、HIV陽性者自身が、自分たちの医療、教育、就業などの基本的な権利を擁護するためのアドボカシー活動を企画・実施できるように支援しました。第二に、医療関係者のHIV/エイズに関する知識を向上し、ベトナム政府が制定したHIV/エイズ法について指導し、彼らがHIV陽性者の人権について理解を深め良質なサービスを提供できるよう研修等を行いました。その他、医療・教育・労働問題に関わる地方行政担当者を養成する政策学校においても、HIV/エイズとHIV陽性者の権利について指導し、地方行政におけるHIV陽性者への差別をなくすことを目指しました。

活動の成果

①HIV陽性者自助グループメンバー 460名が研修に参加し、その後主体的に権利擁護活動ができるようになりました。自助グ



HIV情報コーナーでカウンセリングを行う自助グループメンバーの様子



HIV情報コーナーで啓発教材を配布している様子。HIV陽性のスタッフも勤務しています

ープはHIV感染予防やHIV陽性者の権利を促進するためのイベントを27回開催し、10,210名の参加者を得ました。さらに、アジア太平洋地域のHIV陽性者自助グループとの連携のため、「アジア太平洋地域HIV陽性者ネットワーク」にも参画しました。

②医療関係者240名が研修に参画し、HIVの感染経路に関する理解を深め、院内感染を防ぐための普遍的予防策についての知識を得ました。HIV陽性者の権利についても認識が高まり、HIV陽性者へ良質なサービスを提供できるようになりました。ハノイ市の3つの病院では、HIV情報コーナーを設置し、HIV陽性者へのカウンセリングや情報提供を行っています。

③地方行政官・政策策定者259名が研修に参画し、HIV陽性者の権利について知識を得ました。さらに、HIV陽性者、地方行政官、政策策定者の対話ワークショップも開催し、HIV陽性者の社会的ニーズについての認識を深めました。

また、HIV予防とHIV陽性者への差別をなくすことを目的としたポスターを作成し、医療機関や行政機関へ配布しました。さらに、医療関係者や行政官を対象としたHIV/エイズと陽性者の人権尊重に関するブックレットも作成し配布しました。

事業実施後の変化

以上のような活動の結果、多くの改善が報告されました。例えば、HIV陽性者からは、「差別無く病院で治療を受けられるようになり、医師や看護師の言葉遣いや態度が友好的になった」との報告があります。HIV陽性者の家族によると、「これまで近所の人々から無視されていたが、当事業によるアドボカシーイベントの実施後は、近所の人から無視されることがなくなり、積極的に話しかけられるようになった」とのことです。なお、政策策定者は、「これまでは悪いことをする人がHIV陽性者になると思っていたが、HIV感染経路をよく知り、HIV陽性者の権利も国家法で保障されていることを理解したら、今まで偏見を持っていたのが間違いだったと気づいた」と述べています。

事業終了後の課題

この事業は、2009年10月末をもって終了しましたが、今後もHIV陽性者によるアドボカシー活動は継続される予定です。HIV陽性者自助グループは、自分たちで活動資金を調達し、学校や公共施設でのアドボカシーイベントを開催することを計画しています。病院におけるHIV情報センターも継続し、今後もHIV陽性者のカウンセリングや情報提供を行う予定です。政策学校における、地方行政官へのHIV/エイズと人権に関する講義も継続して実施されることが期待されています。なお、当事業で得た教訓を活かして、HIV陽性者グループおよび保健医療従事者の能力育成、そしてHIV/エイズの影響を受けた子ども達の支援にフォーカスをおいた新規事業も計画しています。

(事業部 尾立 素子)

パキスタン緊急人道支援

パキスタンで大規模な国内避難民(*)が発生

「国内避難民」は紛争や災害などのため家を追われて避難生活を強いられる人々。同様な状況で国境を越えて逃れる人々は「難民」。

2009年4月26日、パキスタン軍による武装勢力の掃討作戦が始まりました。北西辺境州内の3県（ブネール県、スワート県、アッパーディール県）で、500万人以上が家を追われ避難民となりました。このうち190万人は最初の3週間に発生した避難民でした。短期間にこれほど大規模な避難民が発生したのは世界的にも過去15年間になかったことです（5月28日付国連の文書）。避難民は、同州マルダン県、スワービ県、マラカンド県、ノウシェラ県、チャルサッタ県、ローワーディール県、ペシャワール県を中心に避難生活を送っています。

当初、6県で26の避難キャンプが設置されましたが、急増する国内避難民の流入に対処できる状況ではなかったため、キャンプ外の受け入れ家族（親戚や知人や親戚な他人など）の下で避難生活を送る人々が圧倒的に多くなりました。避難先は10%が避難民キャンプ、残り90%が受け入れ家族、学校、路上でした。

中でも、北西辺境州マルダン県（ペシャワールより北西70km、首都イスラマバードより車で1.5時間）は安全な地域への避難ルートに最も近い県なので、避難民の60%が滞在していました。同地域には4つの避難民キャンプがあり、キャンプの外にも、188,859世帯（1,510,872名）が避難民として登録されている状況でした（5月28日現在、社会福祉省および北西辺境州）。

そこで、ケア・インターナショナル ジャパンは、緊急支援活動の一環として、(特活) ジャパン・プラットフォームの助成金により、登録されている避難民が最も多く、緊急支援物資の配給が急務であるマルダン県において支援活動を開始しました。NGOや国連機関、政府組織との連携・調整のもと、3,000世帯（約21,000名）を対象に、現地ニーズの最も高い物資を現在配布しています。配布物資は、蚊帳、床用シート、台所用品、衛生用品、虫除け、女性用ショール（注）、10リットル用水保存タンク、20リットル水用保存タンクです。

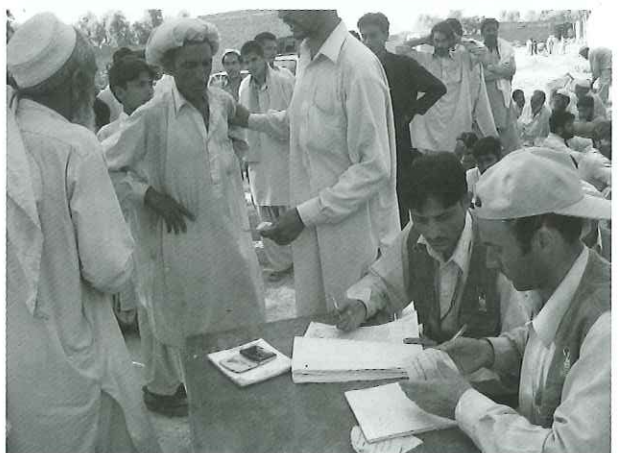
一番必要とされる物資なので、連日蒸し暑い中でも、多くの人が殺到し、支援物資をもらうために行列をつくります。物資を受け取る世帯は、受付で登録を確認してから番号の付いた引換券を受け取り、ずっと順番を待ちます。物資配布担当者（避難民から選ばれたボランティア）が10世帯を対象に、10個の物資セットの山を作ります。引換券の番号と名前が読み上げられると、その世帯は物資の山を受け取り、物資運搬担当者（避難民から選ばれたボランティア）の助けを借り滞在先まで帰っていきます。そして、10世帯分が終了したら、また物資配布担当者が物資セットの山を10個作るという作業が繰り返されます。蒸し暑い（気温45～47度）だけでなく、避難民にとっては様々なストレスが溜まりやすい状況下で、混乱を避け公正に物資がいきわたるよう、現地スタッフ・避難民ボランティアは根気強く対応しています。

（注） 外部者（男性）の目をさけるための女性・子ども用区間をつくるのにも活用。

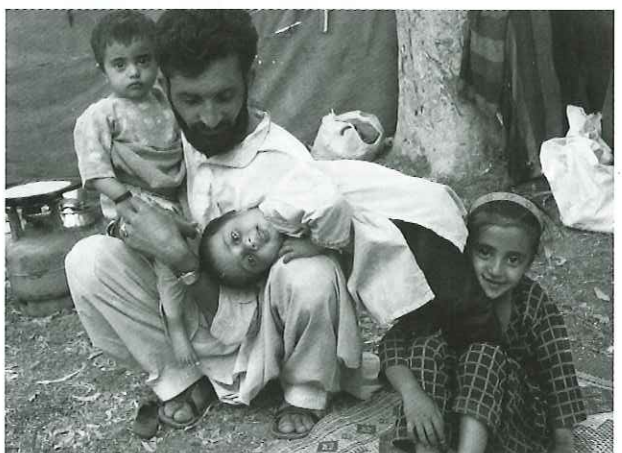
（事業部 武田勝彦）



支援物資を受け取る男性。CAREはニーズの高い物資を配布しています



引換券を確認して物資を配布します



プラスチックシートの上で寛ぐ家族

「緊急支援」における企業の戦略的フィランソピーの可能性

今年4月に発生したパキスタンにおける緊急事態（状況詳細ならびに当財団の国内避難民支援活動の内容については、前頁参照）に際して、当財団は、直ちに個人・企業の皆さまに広く募金を呼びかけるとともに、別途、複数の企業に対して、「自社商品」の提供とその「輸送費」の支援をお願いしました。

程なく、フレッシュハンドメイドコスメを取り扱い、独自にエシカル（※）な活動にも力を入れる（株）ラッシュジャパン様により、石鹸提供のお申し出をいただきました。そして、同社エシカルコミュニケーションチームをはじめ、石鹸の製造、輸出手配、広報など、部署を超えた多くの社員の皆さまのご協力のもと、全3,387個の石鹸（総額1,924,460円相当）を、無事現地に届けることができました。また、同社には厚木の



ポップでカラフルなラッシュジャパン様の石鹸
※イメージ写真で、実際に現地に届けられた石鹸ではありません。

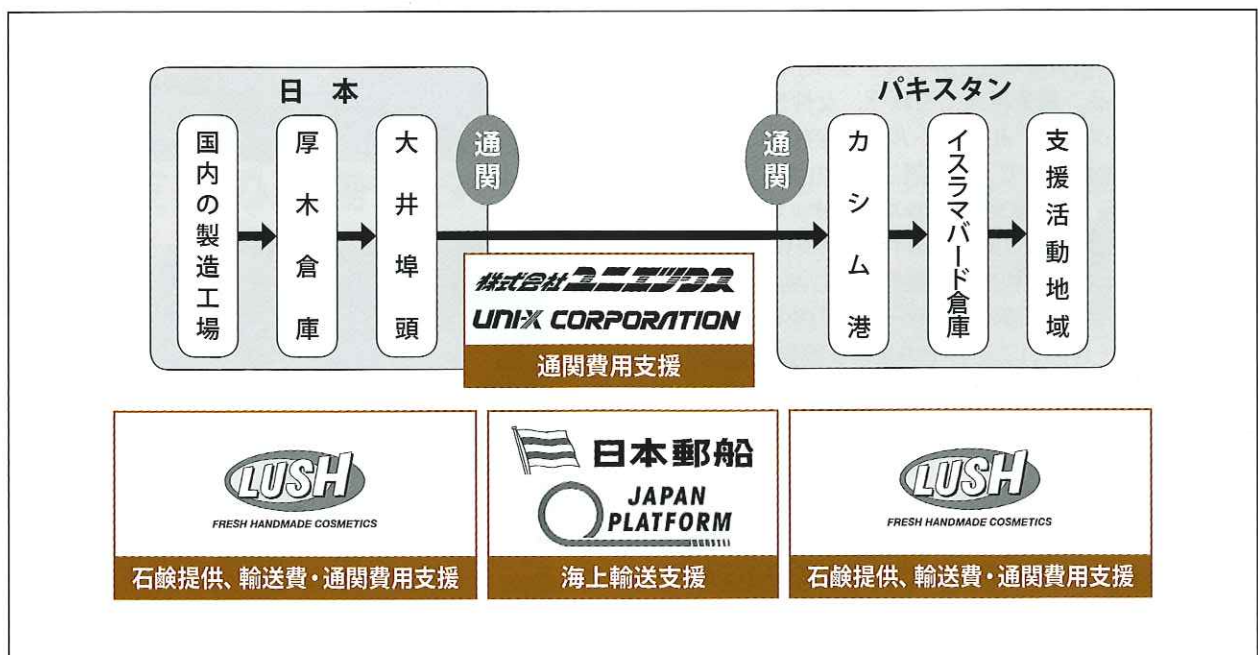
自社倉庫から現地パキスタン活動地への陸上輸送費ならびに通関関連費用の全額をご支援いただきました。

加えて、NGO、政府、経済界、メディア等による対等なパートナーシップのもと国際人道支援を行う、ジャパン・プラットフォーム（JPF）様の仲介により、日本郵船グループ様をご紹介いただき、大井埠頭からカシム港までの海上無償輸送に加え、同社グループで通関業務を担当した株式会社ユニエツクス様には、通関料割引のご支援をいただくことができました。海運業を中心としてさまざまな輸送ネットワークをグローバルに展開している同社だからこそできる、まさに自社の強みを生かしての取り組みとなりました。

この場をお借りして、関係者の皆さまに深く感謝申し上げます。

1945年の設立以来、緊急支援活動の実績が豊富で、国際的にも評価と信頼をいただいているCAREを通じての支援により、被災地における支援活動の効果を最大化することができます。また、現地政府との良好な関係に加えて、CAREは国際的なメディアの取材なども多くうけることから、特に支援企業にとっては、現地国ならびに国際社会における自社のプレゼンスを高めることができるなど、副次的メリットもあります。世界各地での天災・人災が絶えない今、CAREでは、緊急・復興支援に力を入れており、今後もより多くの個人・企業の皆様にご支援いただきたいと願っています。

※「エシカル」な活動とは、「倫理的・道徳的」という意味になりますが、ラッシュジャパンでは環境や社会に配慮し、他を尊重する、という活動を指しています。



（石鹸支援の流れ：ケア・インターナショナルジャパン作成）

事務局からの報告

バナナを食べて社会貢献！ 「富楽宝（ブラボー）」ブランド祝1周年

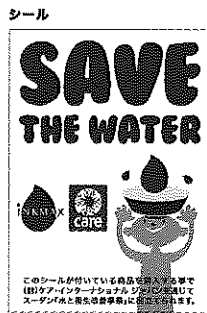
2008年10月にスタートした、丸紅（株）様の輸入果実ブランド「富楽宝」が1周年を迎えました。多くのお客様の支持を得て、同社は、フィリピン産バナナに加え、夏季限定の台湾産マンゴーでも同ブランドを展開。総額6,368,352円（2008年10月～2009年9月分）ものご寄付をいただきました。この場をお借りして、全国の店頭でお買い求めいただいた皆さまをはじめ、丸紅（株）様、そして（株）ダイエー様ほか当該ブランドをお取り扱いいただいている多くの小売店各社に心より感謝申し上げます。これからも、お買い物を通じて、「女性」のエンパワーメントに焦点を当てた事業への継続したご支援をお願いします。

「水」をキーワードに、新・企業連携スタート！

7月1日より、（株）インクマックス様のご支援により、染色時の水やエネルギー消費の大幅な削減を実現する、地球にやさしい超微粒子顔料「uni COLOR ink」の売上の一部を、南部スーダンにおける「水と衛生改善事業」にご寄付いただいています。最新の繊維染色技術を利用して、プレオーガニックコットンを素材とするTシャツやトートバックなど、様々な商品が生まれています。「SAVE THE WATER」のタグが目印です。ぜひ、同社のホームページ（<http://www.inkmax.co.jp>）にてお買い求めください。



写真左：7/18～20の3日間、デックス東京ビーチ（東京・台場）にて開催されたプレオーガニックTシャツ展示即売イベント
写真右：このステッカーが目印



レソト支援のための チャリティコンサートが開催されました

8月7日、イタリア文化会館（東京・九段南）にて、アフリカ南部のレソト支援を目的に、リトル・バイオリニスト事務局主催のチャリティコンサートが開催されました。同国において「栄養改善と農村開発事業」を実施する当財団は、後援団体の1つとして参画。当日はパネル展示をはじめ、CAREオリジナルグッズの販売等を行いました。グローバルに活躍されるバイオリニスト、天満敦子様によるバイオリンをはじめ、クラシック音楽を存分に楽しみいただくとともに、多くの皆さまに「レソト」を知っていただく機会となりました。

「日本モーツァルトコア」による チャリティ演奏会 in Tokyo & Paris

9月24日、CAREフランスが主催する慈善公演として、当財団の数原理事長が団長を務める合唱団によるチャリティコンサートが、パリ・アンヴァリッドのサン・ルイ教会堂で開催されました。またこれに先立ち8月28日には、国内でのプレイベントとして、日本モーツァルトコア事務局主催の演奏会が、めぐろパーシモンホール（東京・目黒）にて開催され、600人を超える多くの皆さまにお越しいただきました。残暑の折、ご来場いただきました皆さま、また収益金の一部をご寄付いただきました合唱団の皆さまに、心より感謝申し上げます。

ケア・フレンズ長野発足



2009年9月15日に、ケア・インターナショナル ジャパンの支援組織、「ケア・フレンズ長野」（会長 塚田稲子）が発足しました。支援組織は、現在全国に5つあり（ケア・フレンズ岡山、東京、札幌、そしてケア・サポーターズクラブ大分、熊本）、今回長野で設立されたのは6つ目となります。300年の歴史があり、老舗旅館からおしゃれなレストランに生まれ変わった善光寺前のTHE FUJIYA GOHONJINで開催された発会式には、鷲澤市長をはじめ、信越放送の田幸社長、長野放送の瀬木副社長、長野国際親善クラブの小出会長、そして姉妹組織の代表の方々や地元の協力者の方々 80名近くが参加されました。ケア・フレンズ長野の会員の方がデザイン・プロデュースされたエコファッションショーや、ピアノのミニコンサートもあり、華やかな雰囲気の中で式典が行われました。好調なスタートを切った「ケア・フレンズ長野」は、今後、地元において国際協力およびCAREの支援活動への理解促進に貢献されることが期待されます。

当日は、「ケア・フレンズ長野」塚田会長より、当財団を代表して理事長の数原が記念寄付を頂きました。紙面を借りて、心より感謝申し上げます。

スーダン水と衛生改善事業

スーダン南部・水と衛生緊急支援事業

～帰還の促進と生活状況の改善へ向けた支援～



トITCHイースト郡の人たちと現地駐在員の荒又さん

スーダンは、アフリカで最大の面積を持つ国です。しかし、南北に分かれて、20年以上に及ぶ内戦で苦しんできました。一時は400万人以上もの難民・避難民が南部スーダンから流出したと言われていました。2005年の包括的和平合意の締結後、その人々の帰還が進められてきました。しかし、治安や生活への不安、劣悪な生活環境といった要因が帰還の妨げとなっていることも事実です。

CAREの事業対象地であるスーダン南部のジョングレイ州トITCHイースト郡では、安全な水へのアクセスが極端に少なく、多くの人々が河川や水たまりといった不衛生な水源に頼らざるを得ない状況にあります。緊急人道支援において望ましいとされる数値が井戸1基あたり500人、南部スーダン政府が目標とする数値が一基あたり1,000人であるのに対し、事業地における現在の状況は1基あたり1,500人以上です。このことから、この地域で安全な水が不足していることが分かります。政府や国連機関、NGOにおいて、安全な水へのアクセスは極めて重要なニーズであるという認識はあるものの、治安や地理的な要因から制限されてしまう移動・輸送手段や、人材の不足、スーダン国内での技術的な問題などから、トITCHイースト郡での援助団体による支援は限られており、状況は逼迫していると言っても過言ではありません。また、トイレなどの衛生施設の絶対的な不足や衛生習慣の欠如などが、人々の健康を害する要因となっています。

ケア・インターナショナル ジャパンは、2009年4月より（特活）ジャパン・プラットフォームの助成を受け、同地域において水と衛生支援を開始しました。この事業では、トITCHイースト郡にある5つのパヤム（郡より小さい行政レベル）において、井戸の掘削と修理、トイレの設置、そして衛生啓発活動を実施しています。

井戸掘削の活動では、井戸を維持・管理する為の水管理委員

会を組織し、彼らへの簡単な技術指導を行っています。これは、住民たちが井戸を正しく使い、故障した際の修理やその他の水にまつわる問題解決などを自分たちの力でできるようにするためです。また、学校においてトイレの数が生徒・児童数に対して、圧倒的に足りません。2009年8月現在も、現地でどの学校へいくつ設置するか、調査による絞り込みを進めていますが、数百人の生徒に対してトイレが一つか二つという学校がいくつもあります。その為、トイレではなく近くの茂みなど場所を選ばずに用を足し、衛生状況がより悪くなるといった悪循環も生んでいます。そこで、トイレの設置は学校を中心に実施することになりました。

井戸掘削・修復、トイレ設置という二つの活動と同時に重要なのが、衛生啓発活動です。もともとのこの地域において人々の衛生に対する意識や知識は極めて低く、衛生習慣に起因する疾患も多くみられます。こうしたことから、衛生意識・知識の向上や衛生習慣の改善の為の活動は非常に重要なのです。このプロジェクトでは、地域の女性からボランティアの衛生普及員を選出し、トレーニングを実施した後、彼女たちを中心に各コミュニティで衛生改善の為の活動を展開していきます。また、学校では子どもたちが「衛生クラブ」などを通じ、正しいトイレの使い方や衛生習慣についてなどの知識を学び、子どもたち自身がそれを各家庭に普及させていくことを期待しています。この事業は、これから2012年までの3年間継続的に実施して行く計画であり、初年度は井戸掘削・修復合わせ11基、トイレ50基を予定し、衛生活動は郡全域で進めていく予定です。

「フェリシモ地球村の基金（株式会社フェリシモ）」の助成対象プロジェクトとして決定。掘削及び修復後の井戸の水質検査に用いる機器の購入費として、60万円をご寄付いただきました。

（事業部 貝原塚 二葉）

スーダン支援の現場から

井戸の設置場所を決めるために…

通常、井戸は集落の中心地に作られるものというイメージがあると思います。しかし、トITCHイースト郡のあるジョングレイ州では、事情が少し異なります。

ここに住む人々は、牛の放牧を生業とする民族で、今でもその生活スタイルを守っている人が数多くいます。牛を中心とした数百人規模の生活共同体が不定期に移動するため、地域に根を下ろして住んでいる人たちと水を巡る争いが生じることがあります。また、内戦中に地域に留まり続けたホストコミュニティと、避難先から帰ってきた帰還民の間でも、水を巡る衝突があります。さらには、帰還によ

る人口増加だけでなく、子どもの数も増えていることから、これまでは共同で使っていた井戸を巡って、コミュニティと学校の間での採め事も増えてきているようです。井戸の掘削場所を決定するまでに、コミュニティとの話し合いにじっくりと時間をかけます。どこに作れば、水を巡る衝突を避けることができ、みんなが平和に水を使えるようになるのか、コミュニティの人たちの言うことに耳を傾けます。この結果、あえて集落のはずれに井戸を掘ることも珍しくないのです。生活向上のために作る井戸が、人々の争いの元とならないように…。

（特活）ジャパン・プラットフォームの助成を受け、新しく掘削してできた井戸



井戸にまつわる悲しい歴史 ①

スーダンの独立後、南部スーダン地域は、北部アラブ系民族により統一国家として統治されました。過去50年間の間、南北間で数度の内戦、和平協定を繰り返す中、比較的安定した時代に、各パヤム（タウン）の中心地には、井戸と機械式のポンプ、高架水槽、水道が設置されていました。現在の給水施設からすると、考えられないほど進んだ設備です。しかし、これら施設は、一部の特権階級の象徴であり、一般住民はこれら施設の恩恵に預かることは無かったそうです。現在、これらの施設は、銃弾の跡を残し、さび付いた状態でそのまま放置されています。

井戸にまつわる悲しい歴史 ②

現在使用されている井戸のうち、和平協定以前から使用されている井戸のほとんどは浅い井戸です。和平協定後に、NGO等により深い水脈から汲み上げるハンドポンプ式井戸が設置されましたが、もともとはバケツとロープで水をくみ上げるオープンタイプの浅い井戸でした。この地域で内戦が激化した1990年代、多勢の人々の命が奪われ、その遺体の多くは、これらの井戸に投げ込まれたのだそうです。

和平協定直後の緊急支援の際には、いろいろと仕方の無



小学校の校庭で打ち合わせをする荒又さん

い事情もあったのでしょう…。こうした井戸内の清掃が行われ、ハンドポンプ式井戸が設置されました。これらの井戸は、今現在でも、人々の生活に必要な水を提供し続けています。不幸な過去があるからと、急に閉じてしまうわけにはいきません。私達ケア・インターナショナル ジャパンのプロジェクトでは、これらの井戸の近隣に新しいハンドポンプ式井戸を建設することにより、これら不幸な過去を持つ浅井戸の数を減らしていこうとしています。

トイレの普及と感染症の防止

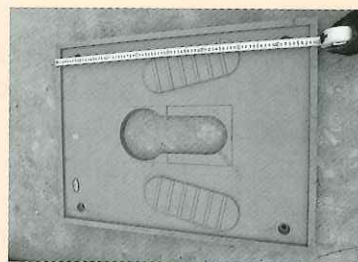
感染症の予防には衛生習慣を身につけること…というのは当たり前のことですが、ここトイチイースト郡では、トイレの重要性がほとんど認識されていませんでした。主な理由は2つです。

1つ目の理由は、彼らは伝統的に、広大な土地で放牧、遊牧する生活スタイルであり、決められたトイレというより、広大なトイレを使用してきたということ。そして、2つ目の理由は、ここトイチイーストの地盤は非常に粒子の細かい砂であり、トイレ用の穴を掘っても、雨季にまとまった雨が降れば簡単に崩壊してしまうため、せっかく苦労してトイレを作っても意味が無い、というあきらめ感があったことです。しかし、和平協定後、避難先からの帰還が始まると、特に、帰還民が多い地域でコレラ等の感染症が流行してしまいました。

CAREが2007年から開始したアッパーナイル地域 水・衛生改善プログラムでは、主に一般世帯を対象として衛生知識の向上とトイレの普及に努めています。しかし、単に、トイレを作るというのでは、持続可能な衛生習慣の改善は望めませんので、住民との共同作業によってトイレを作っています。

まず、コミュニティから選出された衛生教育推進員が各戸を訪問し、衛生習慣の重要性を訴えと共に、住民自身によってトイレ用の穴を掘削するよう指導します。十分な深さの掘削が終わると、穴保護用の古ドラム缶、プラスチック製のスラブ（床板：写真右上）、穴内の臭気を逃がすパイプを住民に配布します。ここから先は、住民自身が作り上げてゆきます。日干しレンガとわらの屋根で可愛らしい小

さな丸いトイレ棟を作る人、金属波板でそれなりのトイレ棟を作る人、屋根の無い目隠しだけのトイレを作る人、様々です。どんな形でも構わない、まずは、各世帯が一つのトイレを持つこと、その第一歩が重要なのです。



スラブ

トイレの普及が進むに従って、コレラ等の感染症の発件数が大幅に減少しました。こういった事実が、さらに多くの人にトイレの重要性を認識させるという相乗効果も上がっています。

今年から始まったケア・インターナショナル ジャパンの事業では、小学校を対象にトイレを建設していきます。トイチイースト郡には32校の小学校がありますが、このうち児童用のトイレが一つも無い学校が19校もあるのです。また、トイレがあったとしても、一つのトイレあたりの児童数が200人～700人という非常に厳しい状況です。学校の衛生状況を改善し、子ども達に衛生習慣の大切さを伝えるという直接的な効果はもちろんのことですが、子どもから各家庭の大人たちに伝わるであろう間接的、波及的な効果を期待しています。

目の前にある現実、一気に解決できるものではありません。しかし、ゆっくりではあっても、確実に、人々の意識が変わってゆくことを実感しながら、プロジェクトを進めています。

（事業部 荒又 多美子）



ニノ ビビルリさん (22歳) と息子のマット君 (7ヶ月)

CAREストーリー

グルジア紛争—あれから1年

～ CARE's assistance was right on time. ～

グルジアとロシアとの間で軍事紛争が勃発して1年が経ちました。敵味方双方の住民が住家から避難し、13万人以上もの人びとが、親類の家、学校、消防署、放棄された病院や工場、また避難テントでの生活を余儀なくされました。軍事衝突は7日間続いただけでしたが、何十万人もの人々が、精神的、社会的、経済的に大きな痛手をこうむりました。

現在ロシアが支配している、南オセチア ゴリ地方のクヴェモ・アツセヴィ出身のニノ ビビルリさん (22才) の話:

私は、戦争が起きたときは、妊娠5ヶ月でした。私たちの村は、ツヒンヴァリ※にとっても近いところにあり、武力衝突の初日から、銃撃にさらされました。夫と私は、事態が悪化する前に、母の住むこの場所に避難してきました。母には、私以外に4人の子どもがいて、末の子は2歳です。家族全員に十分な食事を与えることは殆ど不可能でしたが、CAREが、援助を必要としたその瞬間に食糧・その他の支援を始めてくれました。私たちにとり、寝具は特に大切なものでした。夫の両親は元の村に戻り、夫も時々そこに出かけて行きますが、私は、戻るのには心配です。村にはオセチアの軍隊の駐屯地があります。もし衝突がまた起こったなら、どうすればよいでしょう？産まれてまだ7ヶ月の息子・マットを連れて逃げるなんてきっとできません。地方自治体が、好意で現在使われていない警察署の建物に私たちを住わせてくれました。しかし、生活環境はひどい状態で水道や下水の設備もありません。でもクヴェモ・アツセヴィにいるよりずっと安全です。夫はティビリシで仕事を見つけることが出来ました。これで赤ちゃんに食べさせるためのお金もできました。

※1989年頃から始まって現在も続いている南オセチア紛争で、グルジア軍とオセチア軍の対立や戦闘がしばしば行われている。現在、ツヒンヴァリは南オセチア共和国の首都として、人口約30,000を有する。ただし南オセチア共和国は国際的には認知されていない。

このようにCAREの支援を受けて、復興に向け努力する人たちのストーリーを、当財団ウェブサイトでご覧いただけます。

<http://www.careintjp.org/>

CARE Notice Board

大切な人への贈り物だから クリスマスにはcareギフトを!



「careギフト」のURLは www.caregift.jp です

家族や友達、大切な恋人と一緒に楽しむクリスマスが、もうすぐやってきます。今年はどうな方法で、大切な人に喜んでもらいますか？

CAREがワイデン+ケネディ トウキョウを始めとする各企業とパートナーシップを組んで創り上げたインターネット寄付システム「careギフト」なら、いつもとは違う特別なギフトを贈ることができます!

途上国で貧しさに立ち向かう人には、あなたが選んだ支援というギフトを贈り、あなたの大切な人(家族・友人など)には、世界でたった一つのカードを届けることで、現地の人々の笑顔を分かち合いませんか?もちろん、カードにはあなたからのメッセージも添えられます。

いつもはうまく伝えられない気持ち、素直に言えない「ありがとう」の言葉、モノでは伝えきれないあなたの思いを、「careギフト」と共に大切な人に贈ってみませんか。あなただけが贈る、あの人のためだけの、最高のプレゼント-「careギフト」を是非ご活用ください!

ケア・インターナショナル ジャパン
ニュースレター
CARE World Vol.13
2009年10月30日発行(季刊)
発行人:野口千歳
編集:安部桂花

財団法人 ケア・インターナショナル ジャパン
〒171-0032
東京都豊島区雑司ヶ谷2-3-2
Tel. 03-5950-1335 Fax. 03-5950-1375
E-mail. info@careintjp.org
www.careintjp.org

*このニュースレターのデザイン・レイアウトは、CAREのデザインボランティアさんのご協力により、制作されています。